

本日の学び テーマ：「主がおっしゃったことは必ず」テキスト：ルカ1章39-56節

【理解の手がかりとして】

本課の聖書箇所は、マリアとエリサベトの出会いの箇所。この二人に共通していることはその胎内に「命」を宿しているということ。一人は「ヨハネ」を、そしてもう一人は「イエス」を宿しており、聖霊による大いなる奇跡を経験した二人の女性がここで出会う。

天使から親類のエリサベトの懐妊の知らせを聞いたマリアは、エリサベトを訪ねて山地にあるユダの町へと出かけていった。マリアがザカリアの家に入ってエリサベトに挨拶したとき、エリサベトが反応する前に彼女の胎内の子が「おどった」(1:41)。これは、エリサベトの胎内の子「ヨハネ」がマリアの胎内の子「イエス」の存在を感じて喜んだことを示している。イエス様の先駆者としての役割を果たすことになるヨハネの将来の姿がすでにここに暗示されている。

その胎動と重なり合うようにして、エリサベトは「聖霊に満たされて」(同)マリアを祝福する。その祝福はマリアに対して、そしてマリアの胎内の子に対してであった。エリサベトはそのマリアの胎内の子を「主」と呼んだ。「わたしの主のお母さまがわたしのところに来てくださるとは」(1:43)と。エリサベトはザカリアへの天使のお告げ、「彼はエリヤの霊と力で主に先だって行き」(1:17)という言葉がザカリアから聞いていたのだろう。つまり「主がやがて来られる」ということを信じて、その備えを為すヨハネの命を育てていたのである。

それに続いて、マリアの応答としてあるのが「マリアの賛歌」(1:47-55)である。この賛歌はマグニフィカートと呼ばれる。「わたしの魂は主をあがめ」(1:47)という冒頭の一節の「あがめる」という意味のラテン語である。マグニフィカートとは、本来「大きくする」という意味であり、地震の大きさを表すマグニチュードという語と語源を同じくするもの。神を大きなお方とする、それは神を畏怖し礼拝するということ。「礼拝」とは神への賛美と信頼、そして服従の行為、それがマグニフィカート（あがめる）ということ。

イザヤ書にこうある。「天が地を高く超えているように、わたしの道は、あなたたちの道を、わたしの思いは、あなたたちの思いを、高く超えている」(イザヤ 55:9)。またヨハネの手紙一には、「神は、わたしたちの心よりも大きく、すべてをご存じ」(ヨハネ 3:20)ともある。人間の小さな思いでは捉えることのできない、測り知れない神の思い、御計画、御業というものがある。信仰とはそのことを受け止めることでもある。

そして神がなさることであれば、そのすべてを知り尽くすことはできなくても、絶対的な信頼をもって神にお委ねする、そういう思いがこの賛歌の最初の句である「わたしの魂は主をあがめ、わたしの霊は救い主である神を喜びたたえます」(1:47)には込められている。「わたしの魂」とか「わたしの霊」というのは、「わたしの全存在」「全人格」ということ。また「全生涯」と言っても良い。この賛歌は、人が神に向かうべき究極の姿を言い表すことによって歌い始められている。

何かを「大きくする」ということは、何か「小さくなる」ことを伴う。マリアは言う。

「身分の低い、この主のはしためにも、目を留めてくださったからです」（1:48）と。マリアは自分の事を「身分の低い（者）」と述べた。これは、文字通り社会的に貧しく、低いとされた層に属しているということを意味するもの。多くの人が注目し、目を見張るような高貴さも、輝きも、華やかさも持ち合わせていない存在、それがマリアの自己を見つめる目であった。

クリスマスの出来事は、そのような者、低く小さくされた存在が光に包まれる経験である。この世の評価とは異なる眼差しが向けられる、マリアにそのことが今起きている。貧しく低いマリアに、あるいはマリアの貧しさ低さに、神のみ心が留められている。——「心の貧しい人々は、幸いである。天の国はその人たちのものである」（マタイ 5:3）。

このことは、決してマリア一人の出来事ではない。マリアのように生きている人々すべてに向けられる神の眼差しである。今私たちが生きているこの世界において、神がその眼差しを向け、心に向けられる対象は誰か、ということの証しでもある。今、様々な事柄のゆえに貧しく、低くされている人々の所へ神は降りてきてくださる、と信じる。

そして一方、神の眼差しは、この世の傲れるもの、力をふるうものに対しては、厳しい眼差しを向けられるということ。マリアの賛歌には、神のそのような有り様も歌われている。「主はその腕で力を振るい、思い上がる者を打ち散らし、権力ある者をその座から引き降ろし・・・富める者を空腹のまま追い返されます」（1:52-53）と。

低きが高められ、高きが挫かれる、この逆転が起こる。これが御子イエス様によってもたらされる神の国の姿である。このマリアの賛歌を聞くと、私たちはその両面の事柄を見つめさせられる。クリスマスの時期に必ず触れるこのマリアの賛歌は、そのような仕方、この世界にメッセージを発し続けている。

## ■ 聖書教育より

「クリスマスはこのマリアの賛美を周りの人たちに届けていく時です。」（子どもクラス）